

昔話「味噌買橋」をめぐって

—そのヨーロッパにおける書承と口承—

竹原威滋

一、はじめに

柳田國男が『昔話覧書』において「味噌買橋」について論じて以来、日本でもこの話が日欧共通の話として注目されている。先ず、『讀飛驒採訪日誌』（昭和一四年）所収の、日本で最初の口承資料「夢と夢」を要約して示す。

むかし、丹生川の澤^{そうれ}上の長吉という炭焼きが夢で「高山の味

噌買橋に行けば、よいことが聞ける」と知つて、そこへ行き、何日も立っているが、何も起こらない。五日目に橋のほとりの豆腐屋がわけを聞くので事情を話す。すると豆腐屋は、「私も、ある炭焼きの家の杉の木の下に財宝が埋まっているという夢を見たが、あてにならない」と話す。長吉は急いで帰り、わが家の杉の根を掘ると金銀が出てきて、そのお蔭で長者になる。

柳田は、この話に似た、英國のロンドン橋にまつわる話を紹介したあと、次のように述べている。

一方、稻田浩一氏は『日本昔話通観』で日本の類話を二三話収録し、こう指摘する。

書承的、翻案的なきらいはあるが、日本の伝承風土のなかで培われてきている。⁽⁵⁾

以上、三氏とも、あまりにも日欧の話が似ているので、翻案ではないかと疑いつつも、きっぱりと断定できずいる。しかし、われわれの立場は、「味噌賣橋」は、おそらく大正期以降の翻案が口承化していったのではないかという説にある。この点については、櫻井美紀氏の論文に譲るが、私は、その前段として、ヨーロッパにおいても、この話は、さまざまな地域に定着して、その土地の話として語られていることを論じることにしたい。その際、柳田が『昔話覚書』で挙げた話は、可能な限りその原典にあたり、さらに、レー⁽⁶⁾リヒなどの最近の研究も視野に入れて考察した。

二、ドイツにおける伝承

昔話「味噌賣橋」は、ヨーロッパでは一般に「橋の上の宝の夢」という話として知られている。先ず最初に、ドナウ河に架かるレーゲンスブルクの「石の橋」（一一三五～四七年建設）に結びつけられて語られている。第1回参照。その最古の文献は、一四〇一五世纪のラテン語による物語集『メンサ・ピロソピカ』に收められた「夢について」である。

類話① 〔ラテン語・一五〇八年〕全訳

レーゲンスブルクの近くに住むある農夫が、レーゲンスブルクの橋の上で大きな財宝を見つけるだろうという夢を見た。そ

こで翌朝、農夫がそこへ行くと、ひとりの金持ちの男がやって来て、何か捜しものでもしているのかと農夫に尋ねた。金持ちが事情を知りたがったので、農夫は自分の見た夢を語った。すると金持ちはいきなり農夫の頬を打って、「このばかものめ！おまえは夢など信じるのか！」わしだって、レーゲンスドルフ村のしかじかの農家屋敷のこれこれの柳の木の下で大きな財宝を見つけるだろうという夢を見たぞ」と言った。それを聞いた農夫は、それが自分の家屋敷だとわかったので、「この平手打ちはわたしにはここちのよいものだ！」と言つて、家に帰ると、自分の屋敷の中を掘つて、財宝をどっさり見つけた。⁽⁷⁾ ラテン語版の話はやがて「ドイツ諺七五〇選」所収の話として現われる。編者のアグリコラは「この話はしばしば父から聞いた」と付記していることからわかるように、口頭の伝承に基づいているようだ。

類話② 〔ドイツ語・一五四八年〕全訳

昔、ある男がレーゲンスブルクの橋の上へ行けば金持ちになれる、という夢を見た。男は実際そこへ出かけて行った。そして二週間というもの一日中そこにいた。すると、ひとりの金持ちの商人が、この男は橋の上で毎日何をしているのかと不思議に思い、男に近づいて来て、何か捜しものでもしているのかと尋ねた。男は、「レーゲンスブルクの橋の上に行けば金持ちになれる、という夢を見たのだよ」と答えた。「ああ、夢のことなど言って何になるのだ。夢はうたかた、まやかしだよ。わし

もあの大きな木の下に（と言つて男に木を指さして）お金の入った大きな金が埋まっているという夢を見たのだが、そんなことは気に留めないね。だって、夢はうたかたなのだから」と商人は言つた。そこで男は行つて木の下を掘つてみると、たくさんの宝が見つかった。その宝で男は金持ちになつた。こうして男の見た夢は正夢となつたのである。⁽⁸⁾

アグリコラの話は、ラテン語版の話よりいくぶん形がくずれている。つまり、主人公は「農夫」から「ある男」になり、財宝のある木も「柳の木」から単なる「木」と具体性に欠けている。しかも、財宝も故郷にもどつて発見するのではなく、すぐ橋の近くで見つけるので、「面白味が半減している」というのも、この話の主題は「幸福は、遠くに求めてでも得られず、身近にあるものだ」という点にあるのだから。ちなみに、この類話⁽²⁾は、のちにグリム兄弟によって『ドイツ伝説集』（一八一六年）の第二一二話として収められたので有名になつた。⁽⁹⁾

このように、レーベンスブルク橋をめぐる話は、ラテン語版以来、少しずつ変容をとげ、一七世紀初頭には韻文の形で登場している。⁽¹⁰⁾

Hin auff die RegenBürger Brück,

Do wird er reich werden durchs Glück.

（レーベンスブルクの橋の上へ行け、
心ひで幸運を得て金持ちになるだらう。）

この引用文の脚韻 Brück-Glück（橋—幸運）がのちの口承にも影響を与え、定形化されて、

ヨーロッパにおける「橋の上の宝の夢」の伝承はドイツでは必ずレーベンスブルクで民間に定着したのち、その北方約一五〇キロに位置するフォーケトランドにおいて、一八世紀の初めに第一の故郷を見出すことになる。第1図参照。

類話③〔ドイツ語・一七一四年〕全訳

昔、ある農夫がレーベンスブルクの橋の上で宝を見つけるだらうという夢を見た。そこで農夫はそこへ出かける。そして、自分の見た夢をある男に話す。するとその男は、慰めるどころか、あざけり笑つて、「夢は夢にすぎん、虚しいものだよ、わしも、フォーケトランドに行けば、ある山の一本の木の下で宝を見つけるだらう」という夢を見たんだ。だが、わしは夢などにたぶらかされて、そこへ行く気にはなれなかつたよ」と言った。ところが、農夫はその場所のことによく知つていたので、そこへもどると、掘り始めた。こうして農夫はローマ銀貨のいっぽい入つた壺を見つけた。⁽¹¹⁾

この話は、グリムが採用したアグリコラの話より、内容的にも整つた形になつてゐる。というのは、財宝は、レーベンスブルクの橋の近くでなく、はるか離れた主人公の故郷フォーケトランドで見つかるからである。つまり、以前のラテン語版の話に近い形に復元されている。このように、民間で物語が口頭伝承されるときには、アンダーソンのいう「物語の構造の自己修正作用」がはたらき、本来の形にむどひるのである。レーベンスブルクには、聖ペーター大聖堂など、一三世紀以来の古い教会が多くあり、フォーケトランドの

人々も巡礼に出かけたようだ。そういう事情もあり、この話は、フォーラントランドの人々に好まれ、定着したのであろう。

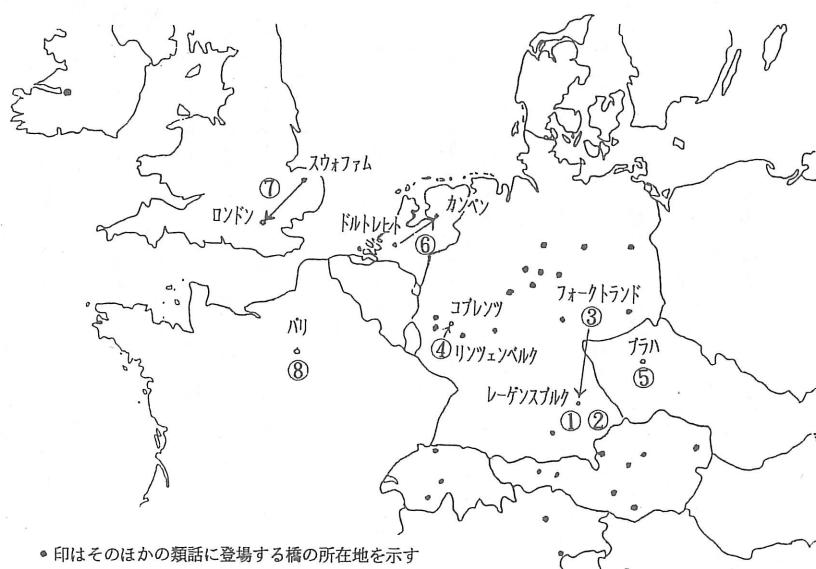
その後、「橋の上の宝の夢」の伝承は、ドイツ各地に伝播したものと思われる。コブレンツのモーゼル橋、フランクフルトのマイン橋、マインツのライン橋、マンハイムのライン橋にまつわる話など、レーリヒの資料によると、ドイツだけで二六ヶ所、五一話が挙げられている。第1図を参照。

そのなかでも、柳田國男も言及している話「コブレンツの橋の上の宝の夢」を紹介しよう。

類話④〔ドイツ語。一九〇八年〕要約

旧リンツェンベルクに住む農夫エンゲル氏が三晩続けて夢を見る—「コブレンツの橋の上には、君の幸運があるよ」。そこで農夫は旅をしてモーゼル橋に出かけるが、幸運に出会わず、旅費の無駄を嘆いていると、歩哨に立つ兵士が現われ、呼びかける。そこで農夫が自分の見た夢を話すと、兵士は「私もリンツェンベルクの古い天水溜めの中に金塊の入った釜があるといふ夢を見たが、そんな村がどこにあるかもわからない」と言う。農夫はすぐに家に帰り、財宝を見つける。それから、村のはずれにある炭酸泉の近くに三軒の大きな家を建てる。それが新リンツェンベルク村の起源となる。この村は特に三十年戦争以前には栄えたところだった。⁽¹³⁾

この伝説は一九〇八年にビルケンフェルト村において民俗学者ローマイナーが聞いて書き留めた話である。また彼は当時の教会戸



第1図 ヨーロッパの類話①～⑧分布図

籍簿を調査して、確かに一六世紀末にエンゲル姓を名乗る人がいたのを突きとめた。その人は商人で森林開発会社を經營していた。森の中の炭酸泉に三軒の大きな家を建て、観光で儲け、急速に金持ちになつたようだ。このような事情から、エンゲル家がこの話と結びつけて語られるようになったのである。

このほかにも、ドイツ語圏では多くの類話が採取されている。レーリヒの資料によると、オーストリアでは、ザルツブルクのザルツアハ橋のほか、五ヶ所、一〇話が挙げられている。また、スイスでは、バーゼルのライン橋のほか、三ヶ所、一〇話が見出される。第1図を参照。黒い点が類話に登場する橋の所在地の分布を示している。

三、ヨーロッパにおける伝承

東欧では、チェコのプラハのモルダウ河に架かる「カール橋」（カール四世が一三五七年に建設）にまつわる話が特に有名である。スヴァーク編の『プラハの伝説と聖者伝』所収の「プラハの橋の上の宝」を取り上げよう。

類話⑤〔チエコ語・一八九一年〕全訳

プラハからそう遠くない、ある村に、ひとりの日雇い農夫が住んでいた。家族が多かつたので、生活に苦しむばかりだった。そこで、農夫は神さまと、ネボムクの聖ヨハネに助けを求めて祈った。ある夜のこと、聖ヨハネが夢枕に現われて「プラハの

橋に行きなさい。そこで宝を見つけるだろう」と言った。農夫はそんな夢は信じられなかつたが、聖人が三晩も夢枕で同じ言葉を繰り返したので、橋の上に宝を求めて、プラハへと向かった。そして農夫は一日中、橋の上を行ったり来たりしたが、何の変わつたこともなかつた。夕方になって、橋のまん中で一日中見張りをしていた兵士が、農夫に気づいて「ここでいっさいそんなに長く何を捜しているのか」と尋ねた。日雇い農夫は自分が夢と、プラハの橋までやつてきた理由を話した。すると、兵士は「それは不思議なことだ！ わしも三晩続けて、ひとつのみを見てね。聖ヨハネさまが、ある村まで旅をするよう命じられたんだ。その村の、ある岩の上には三本の十字架が立っているそうだ。その村の一番奥の小さな家に行かなくてはならないのだ。その庭の垣根に果樹があるそうだ。その木の下で宝を見つけるだらうというのだ」と言つた。そこで、農夫は「それは、わしのあばら屋のことだ。確かに果樹もある！」と叫んで、言った「わしの村には岩の上に三本の十字架が立つてゐる。今こうして一人の夢がかなえられ、宝はわしらのものになるんだ！」先ず聖ヨハネの像に祈りを捧げ、それからわしらの村に行つて、果樹の下で宝を捜そう。神さまのお助けでプラハの橋で見つけた宝を！」こうして一人は、すぐ近くにあるネボムクの聖ヨハネの像のところに行つた。それから兵士は日雇い農夫といつしょに農夫の村に出かけた。そこに着くと、二人はすぐ果樹の下を掘り始めた。すると、まもなく、金貨と銀貨

のどさり入った鉄の大箱が出てきた。正直なことに一人は宝を半分ずつ分けた。こうして二人とも金持ちになった。⁽¹⁴⁾

この話の特徴は、夢にネボムクの聖ヨハネが現われることである。そして、見つけた財宝を一人で分けあつてしていることである。チエコの別の類話では、日雇い農夫はひとりで財宝を発見してひとり占めにしたが、その代わり兵士に娘を嫁にやっている。このようにチエコの類話では、宝のありかを教えてくれた人にお礼をしている。

チエコの話は、ただ単に金持ちの由来譚にならず、聖者伝風の物語に変容しているのである。

「橋の上の宝の夢」の伝承がチエコに定着するのに決定的役割を果たしたのは、ボヘミアの守護聖人、ネボムクの聖ヨハネ（一三四〇～一三九三）と橋に立つその立像である。この聖人は、プラハの大司教の司教総代理を務めていたが、一三九三年、教会権を頑なに守り続けようとしたので、ヴェンツエル四世によって拷問にかけられ、カール橋からモルダウ河に投げ込まれた。まさにその現場に聖人の立像が立てられているのである。そして一八世紀の末まで実際、橋の上に番兵詰所もあつたそうである。また、このカール橋では、毎年五月一六日にネボムクの聖ヨハネ祭が行なわれ、ボヘミア、モラヴィア、スロヴァキアの各地から村人たちが群れをなして詣でに来るという。そんなわけで、人々はみな、橋の上で見張りに立つ兵士のこともよく知つており、ヨーロッパでも最も美しく立派な橋にまつわる物語を好んで語り、またその話に兵士を登場させたとしても、別に不思議なことではない。レーリヒの資料によると、チエコの類

話はすべてプラハの橋にまつわる話で、十話が挙げられている。

西欧では、ドイツに統いて、オランダでかなり古い時期にこの話が民間に好んで語られ、定着していったようだ。既に一六〇九年にラテン語の文献『ラテン、ギリシア、ヘブライ三ヶ国語源辞典』で、その存在が確認されている。

類話⑥〔ラテン語・一六〇七年〕要約

オランダのドルドレヒトに住む若者が放蕩で身を持ちくずし、負債の支払いもできずにいた。そんなある日、カンパンに行けば、解決策を教えてくれる人に橋の上で出会うだろうという夢を見る。そこで、出かけて行って一日中、橋の上をうろついていたところ、同じく橋の上にすわっていた乞食が呼びかけた。若者がわけを話すと、乞食は「夢なんて信じるものではない。わしもドルドレヒトに行けば、ある庭の野バラの木の下で財宝を掘り当てるだろう」という夢を見たが、それを信じるほど、わしは愚かではない」と言う。若者は、すぐに故郷に帰り、自分の庭の木の下に財宝をどっさり見つけて、負債も返すことができた。⁽¹⁵⁾

この話の特徴は、放蕩息子風の物語になつていている点と、橋のある町よりも主人公の住む町のほうが大きいという点である。大都会ドルドレヒトから北部の干拓地近くのカンベンに旅をするのである。この点でヨーロッパのほかの標準的な話とは逆になっている。もつとも、オランダの他の類話、例えば、『フリースラントの昔話』に収められた「お金の入った二個の壺」という話では、干拓地の小村

アルムに住む貧しい男が、夢のお告げ通り、大都会アムステルダムの新橋に行くことになっている。⁽¹⁶⁾

次にイギリスでは、この話は「英國のグリム」とも呼ばれるジェイコブスの英國民話集の中に「スウォファムの行商人」として収められている。

類話⑦〔英語。一六九九年〕要約

ノーフォーク州のスウォファムに住む貧しい行商人が、ロンドン橋に行けば、よい知らせを聞くだろうという夢を三晩も見る。そこへ出かけて三日目に、近くの店の主人が話しかけてくるので、わけを話す。すると店の主人は「わしもスウォファムに住むある行商人の裏庭のカシの木の下に宝があるという夢を見たが、それを信じるほどばかではない」と話す。行商人はすぐ、家にもどり、言われたとおりの所で財宝を見つめた。金持ちになった男は、その後スウォファムの教会を再建した。⁽¹⁷⁾

ジェイコブスは、この話をアブラハム・ド・ラ・プライムが記した日記の一六九九年一月一〇日の記録に基づいて、ほぼ原典どおり書いている。したがって、イギリスのテムズ河に架かるロンドン橋を舞台とする話は、既に一七世紀末には民間に流布していたことになる。レーリヒの資料によると、イングランドでは一〇話が挙げられているが、いずれも「ロンドン・ブリッジ」となっている。スコットランドの話でさえ、ロンドン橋を舞台としている。アイルランドの六話は、いずれも、リムリックの橋になつてている。ところでジェイコブスの話は、行商人で大金持ちになり教会を再建した行商

人に結びつけて話されている。この話の背景には、前述した類話④のエンゲル家の話と似たような成立事情があつたわけである。

ロンドン橋の話の系統の伝承には、次のような二重の財宝発見のモチーフが付加されている場合がある。

主人公は故郷の庭で財宝の壺を発見したあと、その壺の底に難解な文字（例ええばテン語）で銘が刻まれていて、その気に気づく。

家を訪れた客人に解説してもらうと、「この壺の下にもうひとつ壺がある」とわかった。それから、さらに深く掘つて二個目の壺を見つけた。

このモチーフは、先述したオランダのフリースラントの類話やチエコの話にもしばしば登場する。

そのほか、ヨーロッパの類話の中から話の舞台となる橋の所在地名を挙げる。デンマークのコペンハーゲン、イタリアのヴェネチアの「リアルト橋」も登場する。さらに、リトアニア、エストニア、スウェーデン、アイスランドなど北欧にも類話がある。

四、ヨーロッパの伝承の起源

このように、ヨーロッパの伝承は、ドイツ最古のレーベンスブルク橋にまつわる話から始まって、ライン橋、ブランデン橋などヨーロッパ中世の著名な橋をめぐつて、地方により少しずつ違う特色を持つたサブタイプ（地方型）を形づくりながら、伝播していく。ちなみに、レーリヒの資料によると、ヨーロッパだけで四

七ヶ所、計一三話が挙げられている。ところで、個々の話では、このように相異があるにもかかわらず、「橋の上の宝の夢」の伝説は、中世の、共通の文献に遡るのである。それはカール大帝の幼年時代を物語る一二世紀フランスの武勲詩『メネ』のドイツでの翻案作品『カール・マイネット』である。その翻案は、作者は不明であるが、一二世紀に中部ドイツ方言リップアーリ語で書かれた韻文作品である。その冒頭を飾るのが、橋の上での宝の夢を物語る「ホデリヒとハエンフライト」の話である。

類話⑧「リップアーリ語・一二世紀」要約

パリのはずれの小さな村、バルドウフに一人の兄弟、ホデリヒとハエンフライトが住んでいた。ある晩のこと、ホデリヒの枕元にひとりの小びとが現われ、彼を起こして言った「ホデリヒよ、夜が明けたら、パリの橋の上に行きなさい。そこで、幸運と苦痛に出会うだろう」。彼はこの言葉をあまり気にとめないでいたが、三晩も繰り返し小びとに促されたので、ホデリヒは朝早くパリに向かい、橋の上で休息していた。すると、両替屋が彼のところへ来て、どこから来たのかと尋ねた。そこで彼は小びとの命令に従ってやつてきた事情を話した。すると両替屋は彼を叱りつけて言った「わしにもある夜、ひとりの小びとが現われて、バルドウフに行くがよい。そこの小川のほとりの一本の柳の木のもとで莫大な財宝を見つけるだろう」と言われたんだ。だがね、わしは小びとの言うことに従うほど単純なお

つむじやないし、そんなことを信じて鞭打ちの刑に処せられたくないからね。ところで、おまえは愚かにも小びとの言うことに従ったのだから、さあ、この平手打ちをくらうがいい！」こうしてホデリヒは先ず苦痛に出会ったわけだ。しかしま幸運にもめぐりあったのだ。というのも、彼は家に帰って、翌日夜、兄弟のハエンフライトとともに小川のほとりの柳の木の下を掘ると、金や銀、宝石のいっぱい入った壺を見つけたんだから。二人の兄弟は石造りの家を建て、そこに財宝を貯えた。そしてパリに移り、両替や商売でますます金持ちになった。やがて、ピピン王を財政的に支え、それによって王の絶大なる信頼を得た。というのも、ピillin王は死の床でようやく一二歳になつたばかりの息子カールの養育を一人の兄弟に頼み、しかも二人を摂政に就けたのだから。⁽¹⁸⁾

二人の兄弟が財宝でピillin王を支え、未来のカール大帝の摂政になつたというのは、もちろん史実にあわないが、このように中世ではなにかに面白い話があると、カール大帝にまつわる話として採り入れたわけである。

さて、「平手うち」のモチーフは、前述したレーゲンスブルク橋にまつわるラテン語版類話①にも、その名残りをとどめていたのを想起したい。しかし、それ以後のヨーロッパの類話では、平手打ちのモチーフは消えている。したがって、ラテン語版は、『カール・マイネット』の話とヨーロッパの伝承をつなぐ貴重な資料といえる。さて、主人公ホデリヒの住む村バルドウフは、バグダードを連想

させるが、事実、この話はさらに、アラビアの物語集『千一夜物語』に遡ることができる。その第三五一夜に「貧乏してのち、また金持ちとなつた人の話」がある。

類話⑨〔アラビア語・一五世紀末の写本〕要約

財産を使い果たし悲嘆にくれていた男が、ある夜のこと、夢枕に立つたものが、こう言うのを聞く「おまえの幸運はカイロにある。それを求めて、かの地に行くがよい」。男は、バグダードを旅立ち、カイロに着くと、夜になつたので、とあるモスクの中で寝る。ところで隣家に盗賊が入り、男は犯人とまちがえられて、鞭打ちの刑を受けて、牢屋に入れられる。三日後に行なわれた審問に際して、男が夢の話をすると、町奉行は、

大笑いして言う「わしにも夢の中で、バグダードの、ある家屋敷の中庭に泉水があつて、その底に莫大な金貨が埋めてある、と告げる者が現われたのだよ。しかし、わしは出かけたりしかつたよ」。男はその家屋敷とは自分の家のことだと悟り、バグダードにもどつて、財宝を発見した。⁽¹⁹⁾

この話でも、主人公は必ず鞭打ちを受けてから幸運を得ている。これは『カール・マイネット』の平手打ちを受けてから、財宝を発見するとの対応している。すなわち、「幸運」と「苦痛」のモチーフは、明らかに、アラビアの話とカール大帝の幼少物語との結びつきを示している。しかし、橋の代わりにモスクが二つの夢の出会いの場所として登場している点がいかにもアラビアの話らしい。

さらに、アラビアの話の起源となつたと思われる話が、ユダヤの

伝説の中にある。柳田國男も『昔話覧書』で言及しているので、紹介しておく。「一世紀頃に生きていたラビをめぐる話である。

類話⑩〔ペブライ語・時期不詳〕要約

ある若者が、ラビのヨシュア・バル・チャラフタに話した「ぼくは夢でカッパドキアに行って、父の遺産を受け取るようにと命令を受けたんです」。すると、ラビは尋ねた「おまえの父は以前にカッパドキアに住んでいたのか?」若者は答えた「いいえ」。すると、ラビが言った「それではおまえの家の二〇番目の梁の下を捜すがいい」。こうして若者はすぐに帰つて父の遺産を見つけた。⁽²⁰⁾

この話には、語呂合わせがある。つまり、ギリシア語で「カッパ」は「二〇」を意味し、ドコスは「梁」を意味したからである。もっともこの話には、二つの夢の出会いではなく、夢の謎解きになっているので、本来の意味での類話ではない。

以上見てきたように、この伝承は、元來オリエント系の話で、おそらく、十字軍遠征の時代に西ヨーロッパに達し、フランスの武勲詩を経て、ドイツの『カール・マイネット』に採り入れられ、それがヨーロッパ各地の伝説として定着したのである。ヨーロッパに入った段階で二つの夢の出会いが橋と結びつけられたようと思われる。その当時、おそらく石やレンガ造りの橋が人々の注目を浴び、人々の出会いの場所として大きな意味をもつっていたのであろう。

五、中近東における伝承

「橋の上の宝の夢」の伝承は、前節で見たように、ヨーロッパ以外の地域では、橋とは結びついていない。したがって、この伝承は、アルネ＝トンプソンの『昔話の型』では、より包括的な名称「宝は我が家に」(AT1645. The Treasure at Home) という話型として挙げられている。⁽²⁾

ヨーロッパの伝承は文献上、オリエントにその起源があるとわかったので、中近東における口承資料をさらに考察してみよう。ペルシアで生まれ、イラクのバスマラで育ったユダヤ人のナイム・ギレアディが、イスラエル入植後アシュケロンにおいて語った「夢はまやかし」と題する話を先ず見よう。彼はシオニズム活動のため死刑を宣言され、イラクの刑務所にいたとき多くの話を聞いたという。類話⑪〔ヘブライ語。一九六四年〕要約

バスマラ近郊の小さな町に住む貧しい男が仕事を捜しにバグダードに出かけ、とあるモスクで泊っていると、見廻りが現われ、男を鞭打って起こして尋ねる「聖なる場所で寝るのは何事だ」。貧しい男は「カリフの町で何かよい事に出会うという夢を見たもので」と答える。見廻りが「わしも、数日前に、パシャ（高官）の庭の運河のそばに立つナツメヤシの木の下に金貨のいっぱい入った壺があるという夢を見たが、夢はまやかし、気とめない」と言う。貧しい男は日の出とともに言われた所

に行き、財宝を掘り当て、故郷に帰ると家を建て、織維の商売をして大金持ちになり、夢を見る暇もないほど商売が繁昌する。⁽²²⁾ この話は『千一夜物語』のものとほぼ同じ内容である。二つの夢が出会う所は、当然ながら、橋ではなく、モスクになっている。ここにもまた、「鞭打ち」のモチーフが登場している。

次に、井本英一氏が『ペルシア語教本』から採り、訳した話を紹介しよう。この話は教科書用に、ある程度、原話を修正しているが、原話の形はよく保たれているという。

類話⑫〔ペルシア語。一九七一年〕全訳

ある若者の父親が死んだ。彼は父の遺産を使い果たして貧乏になつた。ある夜、彼は父の夢を見た。夢の中で父が言った「エジプトのカイロに行きなさい。そこでお前は宝を見つけるだろう」。若者は翌日エジプトに向かつた。途中いろいろな苦労があつたがカイロに着いた。彼はお腹がすいていたが、物乞いするには恥ずかしいと思った。夜中に物乞いに出かければ、誰に見られる事もない。そうするのがいいと思い、夜中になつてから宿を出た。しかし、警官が彼を見て泥棒だと思った。そこで彼を捕まえて「お前は泥棒だ」と言った。

若者は言った「私はバグダードの人間です」。警官が尋ねた「なぜお前はカイロに来たのか」。若者は答えた「父が死に、遺産を使い果たして貧乏になりました。ある夜、父の夢を見ました。父はカイロに行けば、そこで宝物を見つけることができると言いました。そこでこうしてエジプトへやってきましたのです」。

警官は笑つて言った「私は今まで百回以上、同じ宝の夢をそのありかと共に見てきている。それでも、バグダードには行つたこともない。たった一度夢を見ただけでカイロにやつて来るのは、君も何という愚かな男だ」。若者は、警官が百回以上夢で見た宝はバグダードのどこにあるのか、彼に尋ねた。警官はそのありかを教えた。若者は、宝のありかが自分の家であることを知り驚いた。若者はバグダードに帰り、警官が教えてくれたありかを手がかりにして宝を発見した。

眞の宝はわれわれの目の前にある。しかし、われわれは、他人にそれを求めようとする。⁽²³⁾

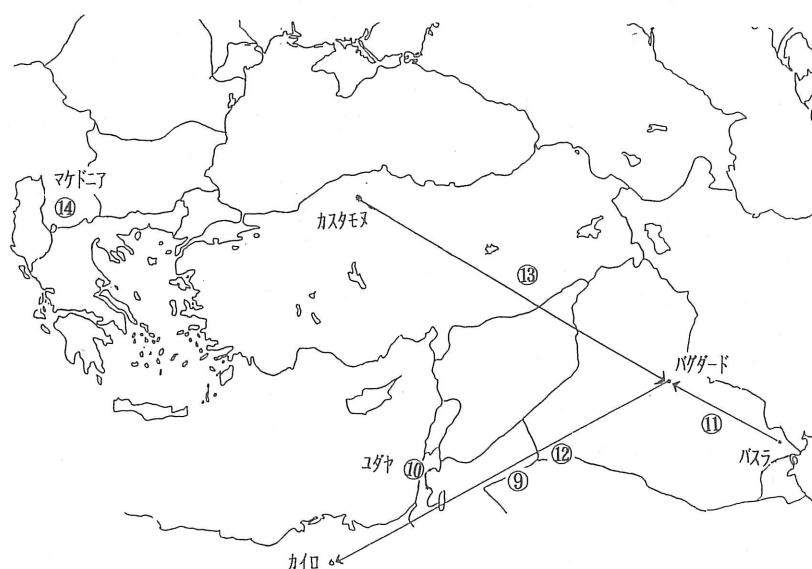
この話は、『千一夜物語』から少しずれている。なるほど、バグダードからカイロに旅し、泥棒とまちがわれる点はまったく同じだが、モスクも難打ちも登場しない。警官が百回以上も夢を見たという点と、最後に教訓がついている点がこの話の特徴といえよう。

次に、トルコのカスタモスで採取された話を示そう。エーバーハルト／ボラタヴ『トルコ昔話の型』の第一三三話「バグダードにおける運命」という話である。

類話⑬ 「トルコ語・一九五三年」要約

ある男が、自分の運命はバグダードにあるという夢を見る。

男はバグダードの街を歩いていて、ブドウの実が口に落ちてきたので、これが自分の運命かと思案していると、ひとりの托鉢僧が現われ、「故郷のおまえの家に財宝が隠されている」と告げる。そこで男は故郷に帰り、財宝を見つけるが、妻には、自



第2図 中近東の類話⑨～⑭分布図

分が卵を生むんだと言い張る。その噂が広まって、役人が卵に税金をかけにくる。そこで男はしぶしぶ黄金を出して見せる。役人は男から⁽²⁴⁾三個の壺を取り上げ、男には一個だけ手元におくことを許す。

後半の卵のモチーフは、おそらくトルコの頗智話集『ナスレッティン・ホジャ物語』に由来しているようだが、前半部は、やはり、

『千一夜物語』のものとほぼ同じである。ただし「ブドウ」のモチーフは他の類話にはない特徴である。ところで、果物のモチーフが登場する話が、マケドニアの類話にある。「男の福の神は腐ったサクランボの中に」という話である。

類話⑭ 「マケドニア語。一九五九年」要約

貧乏神に取り憑かれた男が、夢を見る。その夢に福の神が現われて「近くにある町に行け。そこへ行けば、わしがおまえのため腐ったサクランボの中で働いているのがわかる。そしておまえはすぐに金持ちになるだらう」と言う。そこで、男は町に出かけると、ある食料品店の前にサクランボが落ちていたので、拾うと店の主人に咎められる。そこで事情を話すと、店の主人も自分の見た夢を話すが、そんな夢などわしは信じないと付け加える。男は主人の話した夢のとおりに、自分の家のかまどの下を掘って、財宝を見つける。⁽²⁵⁾

サクランボのモチーフのあるマケドニアの話は、おそらくブドウのモチーフのあるトルコの話と同じ系統の話であろう。マケドニアはヨーロッパに属するので、ヨーロッパ系の橋のモチーフがついた

話が語りくずれたものと、考えられなくもない。しかしまケドニアはかつて五〇〇年もの間トルコの支配下にあり、イスラム文化圏に属していたので、やはり橋のモチーフのつく前の段階のオリエント系の話が変形したものと考えるのが妥当であろう。

六、おわりに

夢は本来、異界からの知らせ、お告げであり、この世とあの世を結ぶものである。同じ機能を持つモスクが、アラビア世界では、二つの夢の出会いの場所として用いられたのも、当然の成り行きかもしない。ヨーロッパでは、二つの世界を結ぶ橋がその役割を担つたのである。その理由はおそらく、前述したように、「宝はわが家に」の伝承が中近東からヨーロッパに伝播した当時、石やレンガ造りの橋が人々の注目を浴び、交易の場所、境界として大きな意味を持つていたからであろう。

今まで扱った類話をさらにつぶさに分析してみると、中近東の類話では、主人公は、「幸運」に出会い、また、「苦痛」を甘受している。類話⑨では、町奉行に鞭打たれたうえ、三日間審問されている。類話⑩では、町奉行に鞭打たれ、類話⑪では、警官に捕まえられる。類話⑫では、ブドウの実が口に落ちてくるし、類話⑭では、サクランボを拾って、食料品店の主人に咎められている。そのあと、いずれの類話でも、苦痛を与えた人物から教えられた夢によって「幸運」を得ている。この「苦悩と幸運」のモチーフは、ヨーロッパの

伝承では、類話⑧『カール・マイネット』と類話①『メンサ・ピロニジカ』にのみ登場する。そしてその後の伝承では、このモチーフは消滅している。前述したように、いわば、ヨーロッパの最古の、いの「」の伝承は、中近東との伝承のつながりを示す貴重な資料である。といひて、「苦惱と幸運」のモチーフは、何を意味しているのか？　いの点について、井本英一氏はこう述べてゐる。

いの打擲は、教区の境界石の上に座られ、父に頬を打たれ

たジョンソン博士の故事と同じような、境界である橋の上の打擲であった。神前で拍手を打つとの同じ行為と考えられ、この世とあの世の活性化を目的としたのであらう。橋の上で頬を打たれることによって、異界からの情報を手に入れることができたのである。⁽²⁶⁾

いのよう、民俗学的な意味を探つてみると、やはりアラビア世界の伝承の方が古代の宗教や儀礼のコンテキストにかなつたものになつてゐるといえる。やがて、この伝承がヨーロッパに入ると、当時の土木技術の粋、橋にまつわる話になつて、橋の持つ本来の宗教的意味も薄れ、「苦痛」のモチーフもすたれたのであらうか。そういえば、主人公に夢を教える人物も、アラビアの伝承ではモスクの見廻り（類話⑨、⑩）、托鉢僧（類話⑪）など宗教者が多く登場するが、ヨーロッパの伝承では、金持ち（類話①、②）、兵士（類話④、⑤）など世俗的人物が目立つ。それも宗教的意味あいの薄れてあた証拠なのであらうか。

以上、考察してきたように、昔話「昧暉賣橋」の伝承は、三一

ロッパでは「橋の上の宝の夢」として知られ、ヨーロッパ各地の著名な橋をめぐり、その土地の伝説として土着化した。その起源は、橋の代わりにモスクの登場するアラビア系の話である。一方、この伝承は、いわゆる「国際的に伝播する伝説」として、ヨーロッパの伝承が翻案を通じて日本でも口承の伝承として民間に定着するに至つたのであるが、いの点については、櫻井美紀氏の次の論文に引き継がれたい。

注

- (1) 澤田四郎作「丹生川昔話集」「續飛驒採訪日誌」(自刊一九三九)
- (2) 柳田國男「昔話覚書」「定本柳田國男集」第六卷(筑摩書房一九六六)四六五頁
- (3) 同書、四六八頁以下。
- (4) 関敬吾『日本昔話大成』第三卷(角川書店一九七八)二四九頁。
- (5) 稲田浩一「昔話タイプ・インデックス」「日本昔話通観」第一二八卷(同朋舎一九八八)一七一頁
- (6) 特にボルトヘルツの資料を用いた。Bolte, Johannes, Zur Sage vom Traum vom Schatze auf der Brücke. In: Zeitschrift des Vereins für Volkskunde, 19 (1909), S. 289-298. — Röhricht, Lutz: Erzählungen des späten Mittelalters und ihr Weiterleben in Literatur und

- Volksdichtung bis zur Gegenwart, Bern (Francke) 1967, Bd. II, S. 122-155 und S. 429-438.
- (7-) Mensa philosophica, tractatus 4, tit. de somniis, Colone 1508, Bl. 47b = Röhrich, a.a.O., S. 129. 追^ト本
「體文」ト也類語の今語^{アラタハタマツルシテ}、今語^{アラタハタマツルシテ} | 四語^{シヨウ}用^{ヨウ}わね
ノ。類語^{シヨウ}の^{アラタハタマツルシテ} | ト也^{アラタハタマツルシテ} | 原語^{ハタマツルシテ}の^{アラタハタマツルシテ}類語^{シヨウ}
ぬい原語^{シヨウ}の記録^{アラタハタマツルシテ} わねた年^{アラタハタマツルシテ} | 原典^{ハタマツルシテ}の出版^{アラタハタマツルシテ} わねた年^{アラタハタマツルシテ}を舉
け^{アラタハタマツルシテ}。也た分布図^{アラタハタマツルシテ} (第1図・第2図) は^{アラタハタマツルシテ} 類語^{シヨウ}
「アラタハタマツルシテ」 (升入^{アラタハタマツルシテ}の故^{アラタハタマツルシテ}) → (升^{アラタハタマツルシテ}や
大^{アラタハタマツルシテ}田^{アラタハタマツルシテ}も^{アラタハタマツルシテ}ト也^{アラタハタマツルシテ}。
- (8) Agricola, Johannes: 750 deutscher Sprüchhwörter er-newert vnd gebessert, 1548, Nr. 623, S. 331.
- (9) Brüder Grimm: Deutsche Sagen, 1816, Nr. 212.
- (10) Eyring, Eucharius: Copia proverbiorum, Eisleben 1604, Bd. 3, S. 324 = Bolte, a.a.O., S. 291.
- (11) Mänling, M. J. Chrl: Auserlesener Kuriositäten Merkwürdiger Traumtempel. Frankfurt u. Leipzig 1714, S. 218 = Röhricht, a.a.O., S. 133f.
- (12) Anderson, Walter: Kaiser und Abt, Helsinki 1923 (FFC42) S. 399ff.
- (13) Lohmeyer, Karl: Der Traum vom Schatz auf der Koblenzer Brücke. In: Zeitschrift des Vereins für Volkskunde, 19 (1909), S. 286-289.
- (14) Svátek, J.: Pražské pověsti a legendy. S. 117f. = Hauffen, A.: Der Schatz auf der Prager Brücke. In: Zeitschrift des Vereins für Volkskunde 10 (1900), S. 433f.
- (15) Fongers, Jan: Etymologicon trilingue latinum, graecum et hebraicum, Lugd. 1607, S. 1110 = Röhrich, a.a.O., S. 131.
- (16) Kooi, Jurien van der: Friesische Märchen. München 1990, S. 181-183. 追^トノ。語^{シヨウ}の日本語^{ハナガシ}が主^{ヌメ}脚^{シヨウ}「歌^{ハナ}」
く^ア也^{シヨウ}の^{シヨウ}也^{シヨウ}『語^{シヨウ}の^{シヨウ}事^{ハナシ}』 四^{シヨウ}長^{ナガ}句^{シヨウ} (日本語^{シヨウ}の^{シヨウ}
語^{シヨウ}十^{シヨウ}社^{シヨウ} | 八^{シヨウ}九^{シヨウ}) も^{シヨウ}參照^{シヨウ}。
- (17) Jacobs, Joseph: More English Fairy Tales. London 1894, S. 91, Nr. 63 "The Peddler of Swaffham".
- (18) Karl Meinet, zum erstenmal hrg. durch Adabert von Keller (= Bibl. d. Lit. Ver. 45), Stuttgart 1858, S. 1-7. = Röhricht, a.a.O., S. 122-128.
- (19) 『福豐極次語』『ト^{アラタハタマツルシテ}・ナ^{アラタハタマツルシテ}』 第六類 (叢書^{アラタハタマツルシテ} | ト^{アラタハタマツルシテ} | 六^{シヨウ}) (升^{アラタハタマツルシテ} | 大^{アラタハタマツルシテ} | 田^{アラタハタマツルシテ}) ト^{アラタハタマツルシテ} — 大^{アラタハタマツルシテ} | 田^{アラタハタマツルシテ}。
- (20) Liungman, Waldemar: Die schwedischen Volksmärchen. Herkunft und Geschichte, Berlin (Akademie) 1961, S. 325. — Bolte, a.a.O., S. 297.
- (21) Aarne, Antti/Thompson, Stith: The Types of the Folktale. (FFC184). Helsinki 1961, S. 469.

- (22) Baharav, Zalman: Sixty Folktales, Collected from Narrators in Ashqelon. Edited and annotated by Dov Noy. Haifa 1964, S. 75-76.
- (23) 井本英一「味噌賣の櫻やめぐら」『大阪外国语語大字譜集』第五印（一九九一），九七頁：トローハー・ソーハー リー『グラン語教本』第11版（マルヒーリー・マーク一九七一）兼五 | 謎。
- (24) Eberhard, W./Boratav, P.N.: Typen türkischer Volksmärchen. Wiesbaden (Franz Steiner) 1953, S. 150. Typ 133 Das Schicksal in Bagdad.
- (25) Cepenkov, Marko K.: Makedonski narodni prikazni, II. Skopje 1959, S. 70, Nr. 67 = Eschker, Wolfgang: Mazedonische Volksmärchen. Düsseldorf (Diederichs) 1972, S. 197-201, Nr. 40.
- (26) 井本英一「詫問畫」 | ○|||圓°
(たかはし・たけしげ／奈良教育大学)